## 「担い合う」＝「奉仕」。責任を背負うこと！

**尾崎** 「担い合う」とは一人でなく複数で責任を持つということ。ここ数年典礼委員長をさせていただいて、当初非常に大変でしたが、周りの委員さんたちがサポートしてくれて〝担い合い〟が実現して非常に助かったという経験をしました。「ともに歩もう」は今年の評議会のテーマですが、なかなか難しい課題です。

**糸井** 〝担う〟という言葉は重くて難しい(しんどい)と思う。私は信仰教育で奉仕グループをやっています。子どもにずっと関わりたかったから奉仕グループでやらせてもらっています。教会の仕事は結局「奉仕」なのでボランティアではない。侍者の親御さん達は奉仕とボランティアの違いがわかっておられない。まあみんなができることを楽しくやればよいのでないか。

**島内** 教会の仕事は、奉仕だ。教会の仕事をして腹を立てるのなら最初からやらなければよい。年齢は関係ない。

**吉永** わたしは結婚して香里に移り住み、それ以来香里教会に所属している吉永由美と申します。以前「こひつじ」誌の編集に関わっていたこともあり、この度、大日様からお誘いを受け、宣教委員会の奉仕グループに入らせていただきました。今日のこの会合に出るようお誘いがあり参加させていただきました。今後「こひつじ」のお手伝いを含めてお世話になります。よろくお願い申し上げます。

## 教会来訪者には親身になって対応を

**司会** 香里教会にも最近外国(ヴェトナム他)の信者や他教会(長崎など)から移籍して来られる信者さん、未信者の方が朝のミサにあずかるため香里を訪れられることがちょくちょくあります。宣教委員会の受付係が門の前で気づけば対応していますが、十分ご案内できない場合があります。

**戸木** 宣教委員だけではなく、

## それぞれに「独自の寄与」を果たそう☀

**司会** 「奉仕グループ」の活用は、老齢化が進む一方の教会において、委員会活動を活性化する手段として考えていくべきです。若い層に働き手が見つかりにくい現状を、中高年者が担い合ってカバーする。奉仕であってボランティアではなく〝責任〟を引き受ける奉仕グループの活用が必要だと思います。

気づいた信者が誰でも率先して行動しないといけませんね。はじめての人、外国の信者を問わずお声掛けをしてご案内するように力を合わせて工夫しましょう。

**島内** ミサ後に外国の方だけでなく、日本の方でも他教会から来られた方の自己紹介をしていただくことを、なるべく早く実現していこう。

**林神父** 受付は大切。みんなで関わるように工夫していきましょう。

## 教会の活動はすべて奉仕

**林神父** イエスが最後の晩さんの前に弟子たちの足を洗う。洗い終わった後、あなた方も互いに足を洗いなさいと言われた。これが教会という共同体の基本です。互いに「仕え合う」、足らざるを補い合う、キリストを真ん中にしての奉仕の集いなんです。大事なことは〝キリストを真ん中にともに歩むということ〟これ自体が目的です。

〝ともに歩む〟が何か結果を出すための方法ではなく〝ともに歩む〟ことそのことが目的であり、結果は問わないんです。たとえばバザーの目的は、あくまでも一つになること、〝ともに歩む〟ことであって、結果は問わない。効率化と利便性を優先すると「できる人」だけが活動し「できない人」が置き去りにされる危険性があります。パウロはコリントの信徒への手紙一で「体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです」と言っている。

体(共同体)の中のもっとも弱い人を助け、生かそうとすることにみんなが協力することによって「真の一致」が生まれる。これこそが教会共同体であり「キリストの体」なのです。

一般的には強いリーダーいてこそ素晴らしいチームになると思われがちですが、教会では一番弱い人を中心としてともに歩んでいく共同体でありたい。

効率や数字をを求めてしまうと強い人、声の大きい人、能力がある人が前に出ちゃう。ついていけない人をどんどん切り捨てて行くことになる。それは会社。私たちは切り捨てない。効率が悪くても、仕事が遅れても、できない人を巻き込んで皆でやった！それが教会の素晴らしい成果。結果じゃない。どれだけ協力者たちと共に歩んだか。それが教会の成果です。90歳のおばぁちゃんと一緒にやっていい。それが〝担い合う〟教会です。

キリストを真ん中にして担い合うこと自体が目的なんです。